

一週間の航海だったが、果たして日本に帰れるのかと心配だったが、鹿兒島に着いて、やっと安心した。上陸して支給された軍服が内地にいた兵隊が復員の時に残していった古服だったのが皆の怒りを買ひ、ポロ服を海中に投げ捨ててウツプンを晴らした。  
突然帰ったので家族は泣いて喜んでくれた。

## 仏に救われたビルマ撤退記

愛媛県 山本 義男

### 〔軍歴〕

昭和十七年一月十日 教育召集三か月で丸亀西部第三八部隊師団通信隊入隊。陸軍二等兵、無線通信手として教育を受く。

昭和十七年四月十日 教育召集解除。同日付臨時召集同隊入隊。無線隊一期検閲は七か月で、その間、送受信、暗号作業等を修得のかたわら歩兵教育を受ける。

昭和十七年七月三十日 陸軍一等兵、師団司令部防衛室勤務。乗馬係勤務。将校当番その他の任務に従事。

昭和十八年十一月二十日 陸軍上等兵。同時にビルマ派遣軍楯八四二部隊に転属。同日坂出港出港。

十一月二十五日宇品港出航、敵艦のさまたげに防戦のすべなく十二月三日呉湊に退避。

昭和十八年十二月六日 呉湊出航。

昭和十九年三月十六日 航行中コレラの疑いで香港陸軍病院に入院。

香港陸軍病院で伝染病として隔離されたが、検査の結果、飲料水にこんにゅうした毒物による胃の炎症で、急性胃腸炎であった。症状は食物をうけつけず、下痢嘔吐がつづき脱水症状となり死にいたるといわれたが、さいわい運がよかった。

入院した病棟の婦長さんが隣村出身の毛利ヤスミ日赤病院の婦長（準士官待遇）さんで、特別に留意していただき、おかげでいのち拾いしたと感謝している。現在も宇和島で元気に暮らしておられます。

昭和十九年五月十五日 香港陸軍病院退院。同日香港

港出航、西貢、タイ、ビルマ方面へ行く混成老軍医  
以下約八十人である。

昭和十九年五月二十六日 西貢上陸。

昭和十九年五月三十日 泰緬国境通過、薪をたいて走る汽車で車内は暑くて屋根にあがる。火の粉がとび、アチコチに穴をあけた。ビルマ領にはいり数回敵機の銃撃を受け、現地人が十数人負傷した。

昭和二十年一月五日 ラングーン到着、軍司令部で十五師団司令部の所在を聞く。汽車で終点のプロームへ着き、そこからイラワジ川を渡ったパトンの工兵隊で糧秣を受け、アラカン山脈越えの準備をした。この工兵隊は善通寺の原隊で、高知県の兵隊であったが親切に教えてくれた。

「おんしら歩いチャヨいかなぞよ。山には虎がウヨウヨシチョルぞよ。急ぐこたない待ちよけ、ウチの兵隊もソング食われたよ。おんしら悪いところへ来たモンジャノ、ここから先や地獄ぞよ、氣付けや」と。

そこで一週間待ち、一行八人トラックに便乗、アラカン横断八十キロ、昼間は飛行機にねらわれるので夜間の

進行である。トラックは三台である。一台では山越えはできないという。はじめてみる原生林と密生した熊ざさ、二十メートルもある名も知れぬ大木にかざすが巻きつき、空をおおっている。道路は、二、三年前に工兵隊が突貫工事をつくった、上り下り、まがりくねった道で、荷台に乗ったものはふりおとされそうで、エンジンの音ばかり山中にコダマする。

運転台のうえに軽機関銃がすえつけてあって心丈夫であるが、運転席から「この辺から虎がでるから、気をつけるように」と声がかかる。まわりかどで急停止した。十メートル先に巨象が立っている。

しばらく行くと、隣のトラックの軽機が「豹だ」といった。前方二十メートルのところにこちらに頭を向け、目を光らせている。車はギヤを入れかえて突き進む。断崖をかけあがったり、その身の軽さ。丘へ出たのか星が見え出す。もうすぐ夜も明ける。「ここで一泊する」と指揮官が言う。

荷台にテントを張って暗い内に車外に出ないように注意され、テントのなかで蚊取線香をたく。虎といえ、

工兵隊が道路作業中数人のものが虎に食われたそうだ。

ウトウトしていたら上の方でコケコッコと鶏が鳴いていた。「おーい。うえの方に人家があるぞ」「馬鹿、野鶏だ」と大笑いである。途中、道を補修したり、飛行機の爆音で退避したり、思うように進めなかったが、それでもやっと四日目にはアラカン横断をおえた。

この奥に通信隊の倉庫があり、兵隊もいるとのこと、道から少しはいったジャングルの中に立ち木を利用した通信隊の滞貨倉庫の小屋があった。ここには香川県生まれの林軍曹、一年後輩の宇田一等兵がおり、事情を話したら、「ご苦労だった、本部はブチドンにいる、連絡をとってやる」と、五号無線機で連絡をとってくれた。隊長からは「近いうちに移動がある様子だから、三人とも林軍曹の指揮下にはいれ」ということだった。ここで他の部隊のものと別れた。

林軍曹は「新鋭がきて、心強い」といって喜び、「しかし、玄米だけはあるが、ほかには何も無い、自活だ。なせばなる、きゅうすれば通ずる」と言う。宇田一等兵も「山菜は何ぼでもある。塩がないのが一番困る。明日は海

水を汲みに行こうと思っていたが、皆がきてくれて助かった」などと言う。林軍曹が「山本さん、貴方がこれから経理主任になってやってや、皆も頼むぜよ」と言って、奥の倉庫へ行った。

私は一番はじめに宇田に、皆に食える山菜とアク抜きなどを教えてもらうようにした。

第一日目の朝がきた。私は一緒にきた門屋一等兵と和田一等兵に、宇田に教わって近所の湿地帯で食べられる草の採取を命じ、私と宇田は四個の水筒と使いふるしの鉛筆を雑嚢にいれ、海水汲みと現地人部落の視察に行った。

海まで約三里、途中十戸ほどの部落がある。反日感情を持っている様子で、兵隊が行くと逃げてしまうと聞かされた。宇田も二度行っただが話にならないという。私はビルマは仏教国であるので、宇田に「部落へ行ったら、日本の兵隊であることを忘れて接してみよ。自分もビルマ人になったつもりで話す。私のことは、日本から最近きた兵隊で、日本では寺の坊主である」と打合せ、出かけた。

そしたらどうであろう。手のひらをかえすような態度で迎え、私の方へ向かって手をあわせおがんだ。私も現地人に向かって手をあわせてはいした。女も子供も出てきた。子供を集めて鉛筆と紙を与え、この部落でまつているパゴダの方角に向かって「三誓下文」のお経をとなえると、現地人もおがんでいた。

私が内地をたつときにもらった守り袋と、一番大きい玉の穴からのぞくと仏様がみえる数珠のおじめを出して、私がおがんだあと、酋長からその仏様をおがませた。酋長はなにやらわけのわからんことをいって頭上にあげておがんだ。女、子供、全員がおがんだあと、最後に私をおがんで「これ売ってほしい」と言った。宇田は、私は「日本に二つある大きな寺の一つの住職であり、これは売れるものではない」といい、そのかわり毎日昼前にくるから、おがみたい人は集まってくるようにつたえた。そして卵、塩、砂糖、ドリヤン、バナナ、その日は鶏二羽もらって帰った。その後、毎日昼まえに部落にいき、何かともらって帰った。それ以来私は「住職」のニックネームで呼ばれることとなった。

昭和二十年一月二十六日、ハ号作戦のため移動命令。同三十日ヘンサタ県オレゴンに到着。河村部隊長に三大隊出発以来の出来事を申告した。ただちに松崎分隊に配置となり、同日付斎藤参謀の指揮下にはいり「宣撫班に従い司令部間の通信業務に服すべし」となった。

斎藤参謀以下海軍軍楽隊(約三十人)、軍医一人、衛生下士官、衛生兵各一人、ビルマ看護婦三人、映画班三人、通信兵九人、輜重隊車両班数人をもって五十五師団出先機関及びその周辺現地部落の宣撫にあたり、好評をうる。約一か月後、原隊復帰した。

昭和二十年四月十五日、陸軍兵長進級。克作戦参加、オレゴン出発、松崎分隊九人は左縦隊、忠兵団、某隊(部落名不詳)へ配属を命ぜられる。某隊はエナンジョン方面へ出発したあとで、後続追及せよということで、ある地点まではトラックの便を借りた。約二百キロ北上したが、まだエナンジョンへは八〇%の地点で車はその地点まで、先には危険で行けないという。

完全武装のうえ、三号無線機、発電機、その他付属品を分散して、一人あたり五十キロを背負う。某隊の所在

を知るため、ロソク（四六時中傍受して、その所属部隊の連絡にあたる司令部所属の無線班）を呼び出してみたが、返信では「左縦隊も某隊も連絡が取れない」と。本部に連絡したら、「追及せよ」との返事で、私と南条の二人で斥候に出ると、道路には一杯の英国戦車があった。

明日は「この道を南下したら、私たちは袋のねずみである」。イラワジ川の対岸に渡るか舟をやって川をすこしでもさがるかで協議した。

松崎が現地人に交渉に行き、夜明けに船頭を連れて帰ってきた。船頭は「日本円は使えない。どんな品物をくれるか」という。現地人は衣料をこのむが、ようやく私の毛布を出して舟に乗った。船頭に不審な行動が見えたら、船頭はその時を最後にする。舟は舟乗りだった野村上等兵指揮してヘンサタまで突き進むこととする。

約一時間、舟は流れにまかせてだった。船頭は「これから先へくだったら家に帰れなくなる。ここまですてくれ」という。しかたない。ここで下舟するが筏をつくるため追加の品を与え、竹を切り出す手伝いをさせる。

直径二十センチもある竹を三十本切って、昼ごろから

晩までかかって川辺まで搬出した。

爆音がした。「飛行機だ。かくれろ」と叫んだが、その時すでに低空で機銃掃射である。皆一目散に近くのジャングルに逃げこんだが、筏の近くで谷口、伊藤が血まみれで倒れている。二人とも、あとから追及した四十歳近い補充兵の上等兵で、子供あり、可哀想に思った。

私たちは今、行くも地獄、止まるも地獄、とほうにくれるとはこのことだと思った。田中が「偵察機ジャッタ。またくるぞ」と言った。急いで死体をジャングルに運んでうめた。松崎が二人の小指を切り、肌着の布にくるんで遺骨として雑糞に入れた。墓標のかわりに小さい木を立てた。私は思わず「南無阿弥陀仏」と手を合わせ、短いお経をとなえた。全員涙していた。

ジャングルは蚊がいてねれない。舟に天幕を張ってゴロ寝をしていたら遠くでポンポンと音がして同じにピカピカと光った。十秒か二十秒して南約一キロの地点で爆音がした。パーツと明るくなった。二人ほど舟から飛びおりてジャングルへ立った。「夕方の偵察機が方角を知らせて長距離砲を撃ったのだ。ピカピカが撃ったと

き。ボンボンが少し遅れた弾着の爆音だ」と松崎が言った。

先日から雨季にはいったとか、止みなしに毎日降り、衣類のかわかす時間がない。ぬれたらしぼってバサバサとやってまた着る。寒くないのが何よりである。水は天幕を張って流れ落ちるのを飯ごうで受け、水筒にいれておく。雨のなかでも火がたける。ビルマにはどこへ行っても竹がある。

田中が早くから通信機にかじりついていたが、在津軍曹から「秘」で「ナマ（生文）」の「サカ（文が逆さ）」で通信があった。文の内容はこの間までいたアラカン山脈の向こうのアキヤブ地区ブチドン、モンドウは敵の手に落ち、「楯」がかわった。すぐに攻撃されイラワジ川まで敵が先にきていたそうだ。

敵さんはスピーカーで「楯部隊の皆さん、ご苦労さんです。奥さんや子供さんがいる日本へ帰れるかと思っただらこんどは、忠兵団に生まれかえて、新鋭部隊にみせてもその手は食いません。まあせいぜい頑張ってください」と盛んに放送している。司令部も近くモールメンへ転進

するらしい。皆もその考えでいるようにと「ナマ」で電報を受けていた。私たち松崎分隊はヘンサダへは帰れない。行く先で会った左縦隊は連絡もとれず、一日も早くブROOMへ出て、山越えをしてトンギーへ出るようにすることがきまった。

やっと、夕方までに筏をくんだ。飛行機を警戒しつつ通信機等を積み込み、谷口と伊藤に最後の別れをした。雨のなかの真暗闇を筏はどどん流れる。急流かと思えばゆるくてとまるようなところもあり、全員が一晩中神経をとがらせた。夜が明け始めた。川幅もだいぶ広くなったようだ。なるべく小さい部落につけようとしたが思うようにいかない。明るくなると危険なので、茂みに筏を引き寄せ、ジャングルのなかで一日様子をみた。

沖の方を船が通るが我々の筏には気がつかないようすで、飛行機の爆音はしても姿がみえない。だいぶ辺地のようであった。

暗闇のなかでは人家はわからない。明るいうちにここを出ようということにして、また筏を押し出し流れに乗った。しばらく流れると部落がみえ、敵がいるか味方

がいるか、一か八かで上陸した。戦闘準備といっても通信隊は三八式の豆鉄砲と手榴弾、小銃弾六十発で、それでもすぐ間にあうようにして岸に着けた。

岸には大勢の現地人がきた。人なつくく筏にロープをなげてつなぎ、荷揚げを手伝ったりする。この向こうに日本兵もいるというので、松崎、田中と三人で行くと、桜井兵団所属の獣医隊の衛生曹長と五人の兵がいた。兵の一人がマラリヤで発熱して脳症をおこしてうわごとを言っていた。ラングーンへ一緒に連れていき、入院させたいと言ったが、病人と同行はできず、他の二人を連れて行くことにした。ここはプロム付近であった。

現地人の牛車をかり、いつくるかわからない汽車を待つこととした。現地人の職員が「明朝汽車が出る。人は乗れるが、これだけの荷物はだめだ」という。獣医部曹長に貰った傷薬や膏薬を与えて積んでもらうことにした。

夜遅く汽車が入って「昼間は危険だから夕方出る」という。私たちは全員その汽車の中で寝た。つぎの日の朝ラングーンに着いたが、軍の車がきて「敵が攻撃してき

た。ただちに戦闘態勢につけ」といって走りさった。私たちはこんなところにいたら大変だと、現地人に無理に頼んで牛車に荷物を積み、安全と思われるところまで逃げた。そのうち、装甲車、戦車が市街地をあばれまわる。六、七機の飛行機が撃ちながら旋回する。友軍も重軽機で応戦、高射砲も撃つが命中弾はないようだ。

我々も日暮れを待ってラングーンを出ようということとなり現地人、牛車をさがしたが、牛車は荷物を積んだまま逃げられた。

しかしその後牛車をもらいうけた。思わぬ牛車が入手できたので、気楽な旅となり、ラングーンを出てから四、五日かかる予定だったペグーに二日目に着いた。

真暗闇のなかで懐中電灯の点滅によるパチパチ信号のような光が、あちらこちらで信号としてとりあっている。点滅はモールの字になっていない。「おーい。気をつけよ。反乱軍かも知れんぞ」。それぞれ銃をかまえながら進んだ。

反乱軍とはビルマ国防軍として日本軍が教育していたもので、日本の軍事情報悪化を察知して、教育兵を殺害、

兵器を略奪して各方面に分散、日本兵が少数であると襲撃して兵器などをうばうのである。

私たちが牛車に二人、五十メートル先に三人、五十メートル後方に三人、二百メートル先にも先行させ、「撃て」の号令で一斉に点滅した場所三か所を狙い撃ちした。

翌日ペギー到着、一泊。聞くとシットン河には渡し舟がないといっているうちに、南条が熱発。マラリヤは毎日一時間遅れに一週間発熱する。ペギーでつぎつぎ熱発で半月ほどおくれた。エンキ（塩酸キニーネ）マラリヤ特效薬）でもあれば早くなおるのに薬がない。

シットン河岸にくる。渡るには不安があり、他隊も二組渡河するという。松崎分隊は全員泳げると聞き、ほっとする。これにも作戦がある。私たちは現地人にノアレ（牛車）を与え、四メートル角の筏をつくらせる（他隊は二メートル）。少なくとも三キロ上流から筏をだす（他隊は一キロぐらい）。その準備と米、砂糖、エンジン（衣料品）をもらうよう約束した現地人が五人と、私たちが上等の筏ができた。装具を全部中央に三段に組んだ席に

積み、現地人に牛車とかえてもらった品を積み、全員肌着になり河へはいった。河はゆるやかに流れているようだが、下（底）へいくほど急流になっている。素肌のでた手足、脛を魚がつつ突く。

先日のイラワジ河の筏の経験があり、全員無事渡った。対岸で逢った人々の話では、二組、四人が流され生死不明という。

ここでようすを聞くと、モールメンに通ずる道路は四六時中飛行機が監視し、絶対通れないというので、山越であるが迂回することとした。道は脛から下まで深い泥沼で、二百メートルも行くともう死体がころがっている。松崎が「その意気、その意気、皆シツカリセーヨ」と大声で言った。「これは歩けん。これは歩けん」と口々に言いながら、足踏みに近い行軍である。雨はやむことなく降る。久しぶりの昼間の行軍であった。飛行機はたびたび飛んでもなにもしない。松崎が「これやイカン、通信気も発電機もホカソウヤ（捨てよう）」と言い出した。私も通信機を背囊にいれ、南条は元気で発電機を背負っているが、そういうと一層重く感じる。行軍はあち

こちに死体のころがっている泥沼を進む。

熱発する者も出た。これではどうにもならんと向こうの谷間に家があり、他隊の者は反乱軍の住家というが、どうせ死ぬなら敵意をもったものとも一緒に死のうということで、皆で行くことにした。道でないところは歩きよい。私たちが行くのを現地人も驚いてみており、逃げるようすもない。行き着くと、思ったより好意的で、素足に巻いた毛布を見て「ミヤジムカンブー（これはいけない）」という。

「酋長はだれか」と聞き、出てきた老人に対して

「私の話を聞いてくれ、私はビルマ人が大好きである。貴男方をご存知のインド。そしてビルマ、支那、日本と仏教は伝わり、ビルマは日本の先輩である。仏様が同じである。これを見てくれ」と数珠の仏様をのぞかせた。

「私は戦争はきらいだ。しかし日本のジジマスタ（偉い人）のなかには仏様を信仰しない人がいて、その人たちのために殺し合いをして、私たちは今、敗北している。これで偉い人たちも目が覚めるだろう。私は戦争が済ん

でも日本へは帰らない。ビルマにとどまる。ここへくる

道々に白骨をみた。人は一度死ぬ。死がこわくはないが、私はどうしてもモールメンの寺院に大切な用事がある。

今死ぬわけにいかない。あなたがたに差し支えなければモールメンへいく近道を案内をして頂きたい」と言って合掌した。そしたら松崎が

「このかたは日本に二つある最も大きな寺院の一つの住職だ」と

と打合せ通りの話をした。

一行は現地の服装に着がえ、安全なところまで本街道を牛車二台に乗って、モーチ（白骨街道）を越えた者より一か月も早くモールメンに到着した。モールメンでは仏様のお陰ですと、毎朝合掌いたしました。

昭和二十年八月十四日 仏領印度支那へ転進中、泰・バンコックにて終戦を聞く。

昭和二十年八月二十四日 仏印サンジャック到着。武装解除するも歩兵二個大隊と通信兵十人が仏軍マレー准将の指揮下にはいり、某地区（地名不詳）で船に乗り、河をさかのぼること約十時間内の地点の討伐に行き、帰

隊。その間本隊は農業班、雑作業班、清掃、防空壕埋め等の作業をしていた。

私たちは討伐より帰ってからカンボジャ王城警備等に  
従事。

昭和二十一年五月八日 内地帰還のため「米山丸（石炭運搬船）で西貢出航、帰途につく。

昭和二十一年五月二十二日 鹿兒島港上陸。同二十三  
日召集解除。同二十五日帰郷。

苦勞と犠牲の多かった

ビルマの工兵連隊

兵庫県 藤井力 泉

―藤井さんは大正十二年九月生まれということですが、召集ですか、現役ですか、兵科はなにだったのですか。

私は十九年三月に、広島西部第七部隊の工兵隊（爆心地より北側の牛田町）へ召集されたのですが、現役よ

り一か月早かった。第二乙種で三か月の教育召集でした。

工兵の訓練は厳しい、爆薬で戦車への肉迫攻撃、キャタピラの下へ入れる。架橋、太田川の川原で爆破作業、漕舟は音戸の瀬戸の急流でやるが、目的地に着くには一キロ手前を目標にしないと目的地へ着かない。鉄舟、折疊舟で約一か月間、下手な者は水の垢取りで背中へ水をいれられる。

私は体力的には大変だったが、百姓だったので力はあると思われた。私の時は体の適性などあまり考えなかったのかな。

基礎訓練三か月、その間歩兵のやることは全部やり、その他工兵の訓練も、縄の結束だけで九とおりぐらいある。教育召集解除になって、引きつづいて臨時召集、五月末に久留米の工兵隊へ転属になった。久留米には肉弾三勇士の銅像があり、伝統的な連隊だったので、訓練は広島より辛かった。

約一か月ですぐ朝鮮の平壤へ行ったが、出発の時はどこへ行くのかわからなかった。玄海灘を渡ったが、もう